

月例経済報告の変遷

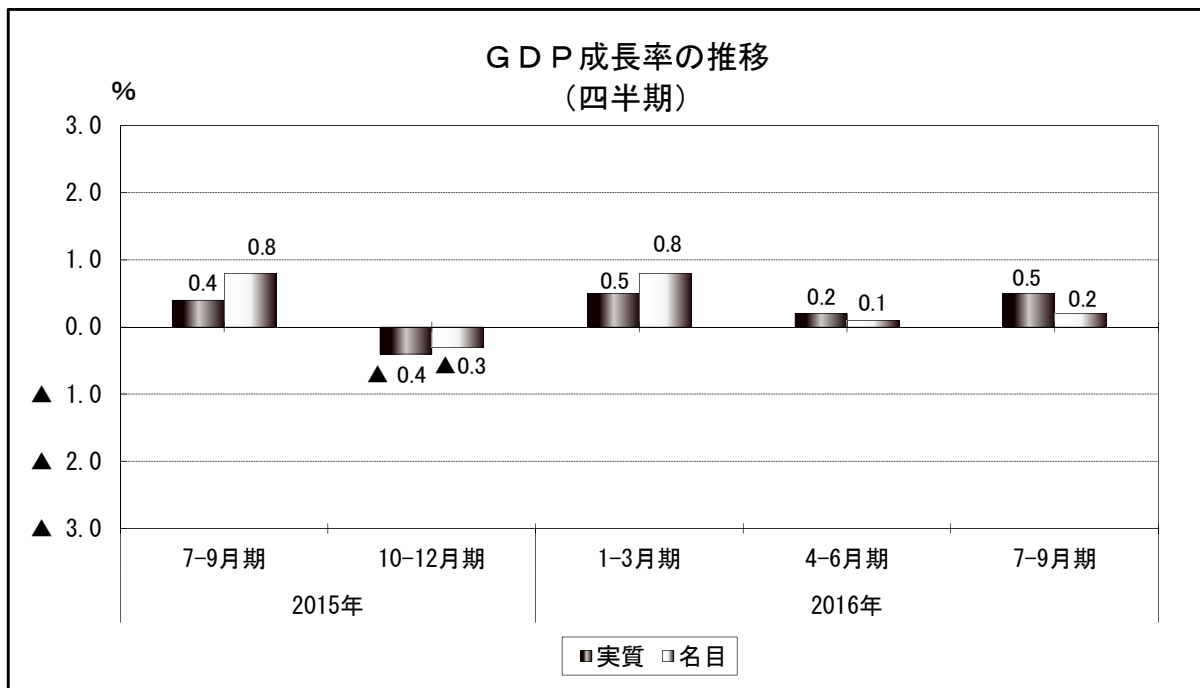
	平成28年	
	9月	10月
基 調 判 断	<p>景気は、このところ弱さもみられるが、緩やかな回復基調が続いている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・個人消費は、総じてみれば底堅い動きとなっている。 ・設備投資は、持ち直しの動きに足踏みがみられる。 ・輸出は、おおむね横ばいとなっている。 ・生産は、横ばいとなっている。 ・企業収益は、高い水準にあるものの、改善に足踏みがみられる。企業の業況判断は、慎重さがみられる。 ・雇用情勢は、改善している。 ・消費者物価は、横ばいとなっている。 <p>先行きについては、雇用・所得環境の改善が続くなかで、各種政策の効果もあって、緩やかな回復に向かうことが期待される。ただし、海外経済で弱さがみられており、中国を始めとするアジア新興国や資源国等の景気が下振れし、我が国の景気が下押しされるリスクがある。また、英国のEU離脱問題など、海外経済の不確実性の高まりや金融資本市場の変動の影響に留意する必要がある。</p>	<p>景気は、このところ弱さもみられるが、緩やかな回復基調が続いている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・個人消費は、総じてみれば底堅い動きとなっている。 ・設備投資は、持ち直しの動きに足踏みがみられる。 ・輸出は、おおむね横ばいとなっている。 ・生産は、持ち直しの動きがみられる。 ・企業収益は、高い水準にあるものの、改善に足踏みがみられる。企業の業況判断は、<u>一部に慎重さがみられるものの、おおむね横ばいとなっている。</u> ・雇用情勢は、改善している。 ・消費者物価は、横ばいとなっている。 <p>先行きについては、雇用・所得環境の改善が続くなかで、各種政策の効果もあって、緩やかな回復に向かうことが期待される。ただし、海外経済で弱さがみられており、中国を始めとするアジア新興国等の景気が下振れし、我が国の景気が下押しされるリスクがある。また、英国のEU離脱問題など、海外経済の不確実性の高まりや金融資本市場の変動の影響に留意する必要がある。</p>
個 人 消 費	総じてみれば底堅い動きとなっている。	総じてみれば底堅い動きとなっている。
設 備 投 資	<u>持ち直しの動きに足踏みがみられる。</u>	持ち直しの動きに足踏みがみられる。
住 宅 建 設	持ち直している。	<u>このところ横ばいとなっている。</u>
公 共 投 資	このところ底堅い動きとなっている。	底堅い動きとなっている。
輸 出 入	輸出は、おおむね横ばいとなっている。 輸入は、おおむね横ばいとなっている。	輸出は、おおむね横ばいとなっている。 輸入は、おおむね横ばいとなっている。
国 際 収 支	貿易・サービス収支は、黒字は、横ばいとなっている。	貿易・サービス収支は、黒字は、横ばいとなっている。
鉱 工 業 生産・出荷・在庫	生産は、横ばいとなっている。	<u>生産は、持ち直しの動きがみられる。</u>
企 業 の 向	企業収益は、高い水準にあるものの、改善に足踏みがみられる。 企業の業況判断は、慎重さがみられる。	企業収益は、高い水準にあるものの、改善に足踏みがみられる。 企業の業況判断は、 <u>一部に慎重さがみられるものの、おおむね横ばいとなっている。</u>
倒 産 件 数	おおむね横ばいとなっている。	おおむね横ばいとなっている。
雇 用 情 勢	雇用情勢は、改善している。 完全失業率は、7月は前月比0.1%ポイント低下し、3.0%となった。	雇用情勢は、改善している。 完全失業率は、8月は前月比0.1%ポイント上昇し、3.1%となった。
政 策 態 度	<p>政府は、東日本大震災からの復興・創生に向けて取り組むとともに、デフレからの脱却を確実なものとし、経済再生と財政健全化の双方を同時に実現していく。このため、「経済財政運営と改革の基本方針2016」、「日本再興戦略2016」、「規制改革実施計画」、「まち・ひと・しごと創生基本方針2016」及び「ニッポン一億総活躍プラン」を着実に実行する。また、平成27年度補正予算を迅速かつ着実に実施するとともに、平成28年度予算について、できる限り上半期に前倒して実施する。さらに、働き方改革に取り組み、年度内を目標に「働き方改革」の具体的な実行計画を取りまとめるとともに、デフレから完全に脱却し、しっかりと成長していく道筋をつけるため、「未来への投資を実現する経済対策」を実施する。</p> <p>平成28年度補正予算等を活用することにより、平成28年(2016年)熊本地震による被災者の生活への支援等に万全を期すとともに、地域経済の早期回復や産業復旧に取り組む。</p> <p>これらにより、好調な企業収益を、投資の増加や賃上げ・雇用環境の更なる改善等につなげ、地域や中小・小規模事業者も含めた経済の好循環の更なる拡大を実現する。日本銀行には、経済・物価情勢を踏まえつつ、2%の物価安定目標を実現することを期待する。</p>	<p>政府は、東日本大震災からの復興・創生に向けて取り組むとともに、デフレからの脱却を確実なものとし、経済再生と財政健全化の双方を同時に実現していく。このため、「経済財政運営と改革の基本方針2016」、「日本再興戦略2016」、「規制改革実施計画」、「まち・ひと・しごと創生基本方針2016」及び「ニッポン一億総活躍プラン」を着実に実行する。さらに、働き方改革に取り組み、年度内を目標に「働き方改革」の具体的な実行計画を取りまとめるとともに、デフレから完全に脱却し、しっかりと成長していく道筋をつけるため、「未来への投資を実現する経済対策」及びそれを具体化する平成28年度第2次補正予算を円滑かつ着実に実施する。</p> <p>平成28年度補正予算等を活用することにより、平成28年(2016年)熊本地震による被災者の生活への支援等に万全を期すとともに、地域経済の早期回復や産業復旧に取り組む。</p> <p>これらにより、好調な企業収益を、投資の増加や賃上げ・雇用環境の更なる改善等につなげ、地域や中小・小規模事業者も含めた経済の好循環の更なる拡大を実現する。<u>日本銀行は、9月21日、2%の物価安定目標の実現のため、長金利操作付き量的・質的金融緩和の導入を決定した。</u></p> <p>日本銀行には、経済・物価情勢を踏まえつつ、2%の物価安定目標を実現することを期待する。</p>

(備考)下線部は、先月から変更した部分。

○2016(平成28)年7～9月期四半期別GDP速報（1次速報値）

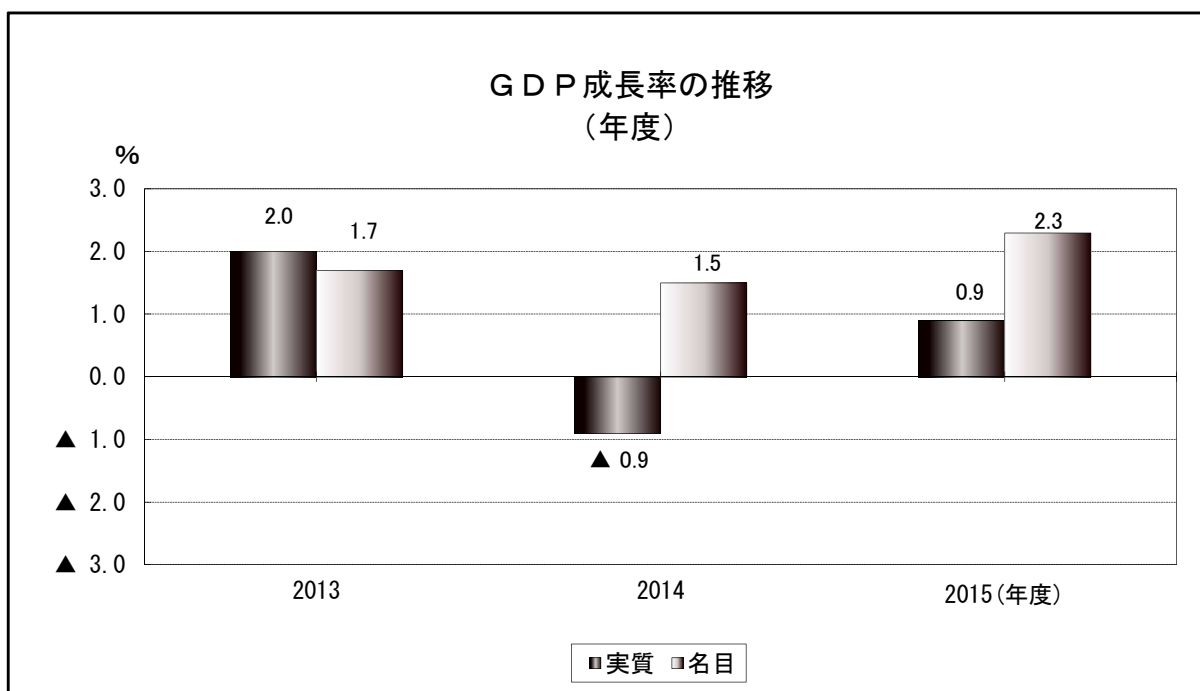
・ GDP成長率（季節調整済前期比）

2016年7～9月期の実質GDP（国内総生産・2005暦年連鎖価格）の成長率は、0.5%（年率2.2%）となった。また、名目GDPの成長率は、0.2%（年率0.8%）となった。



・ 2015年度のGDP

2015年度の実質GDP成長率は0.9%、名目GDP成長率は2.3%となった。



○平成28年度の政府経済見通し（主要経済指標）

	平成26年度 (実績)	平成27年度 (実績見込み)	平成28年度 (見通し)	対前年度比増減率					
				平成26年度		平成27年度		平成28年度	
				兆円 (名目)	兆円程度 (名目)	% (名目)	% (実質)	%程度 (名目)	%程度 (実質)
国内総生産	489.6	503.1	518.8	1.5	▲ 1.0	2.7	1.2	3.1	1.7
民間最終消費支出	293.2	295.9	304.9	▲ 0.8	▲ 2.9	0.9	1.0	3.0	2.0
民間住宅	14.4	14.8	15.6	▲ 8.5	▲ 11.7	2.7	2.8	5.0	3.8
民間企業設備	68.4	70.7	74.7	1.6	0.1	3.4	2.8	5.6	4.5
民間在庫品増加 ()内は寄与度	0.2	1.1	0.3	(0.6)	(0.6)	(0.2)	(0.2)	(▲ 0.2)	(▲ 0.2)
政府支出	124.7	124.0	124.6	1.9	▲ 0.3	▲ 0.6	▲ 0.6	0.5	0.0
政府最終消費支出	101.0	102.3	103.2	2.2	0.1	1.3	1.4	0.9	-0.4
公的固定資本形成	23.7	21.7	21.4	0.4	▲ 2.6	▲ 8.4	▲ 8.5	▲ 1.1	▲ 2.1
財貨・サービスの輸出	88.4	90.4	95.7	10.5	7.8	2.3	2.1	5.8	4.8
(控除)財貨・サービスの輸入	99.7	93.8	97.0	3.9	3.3	▲ 5.9	1.4	3.4	5.2
内需寄与度				0.5	▲ 1.6	1.1	1.1	2.7	1.8
民間寄与度				0.1	▲ 1.5	1.3	1.2	2.6	1.8
公需寄与度				0.5	▲ 0.1	▲ 0.2	▲ 0.2	0.1	0.0
外需寄与度				1.0	0.6	1.6	0.1	0.4	▲ 0.1
国民所得	364.4	374.2	385.9	1.5		2.7		3.1	
雇業者報酬	252.5	256.0	262.4	1.9		1.4		2.5	
財産所得	25.0	25.6	26.0	9.6		2.3		1.8	
企業所得		87.0	92.6	97.4	▲ 1.7		6.5	5.2	
国民総所得	2.1	510.7	527.1	543.8	2.1	▲ 0.4	3.2	3.0	3.2
%程度									
労働・雇用	0.2	万人	万人	万人			%	%程度	
労働力人口	0.2	6,593	6,606	6,620			0.2	0.2	
就業者数	0.3	6,360	6,385	6,405			0.6	0.4	
雇業者数	0.4	5,607	5,643	5,665			0.8	0.6	
完全失業率		%	%程度	%程度					
		3.5	3.3	3.2					
生産		%	%程度	%程度					
鉱工業生産指数・増減率		▲ 0.4	0.1	3.2					
物価		%	%程度	%程度					
国内企業物価指数・変化率		2.8	▲ 2.9	0.2					
消費者物価指数・変化率		2.9	0.4	1.2					
GDPデフレーター・変化率		2.5	1.5	1.4					
%程度									
国際収支		兆円	兆円程度	兆円程度			%	%程度	
貿易・サービス収支		▲ 9.3	▲ 0.9	1.5					
貿易収支		▲ 6.6	0.5	1.9					
輸出	4.4	75.6	75.7	79.0			8.4	0.1	
輸入	2.7	82.2	75.2	77.2			1.8	▲ 8.6	
経常収支		7.9	18.5	21.7					
経常収支対名目GDP比		%	%程度	%程度					
		1.6	3.7	4.2					

(注1) 消費者物価指数は総合である。

(注2) 消費税率上げの影響を機械的に除いて試算すると、平成26年度の消費者物価指数・変化率は0.9%程度、GDPデフレーター・変化率は1.1%程度と見込まれる。

- ※ 本経済見通しに当たっては、「2. 平成28年度の経済財政運営の基本的態度」に記された経済財政運営を前提としている。
- ※ 世界GDP(日本を除く)、円相場、原油輸入価格については、以下の前提を置いている。なお、これらは、作業のための想定であって、政府としての予測あるいは見通しを示すものではない。

	平成26年度 (実績)	平成27年度	平成28年度
世界GDP(日本を除く)の実質成長率(%)	3.1	2.8	3.3
円相場(円/ドル)	110.0	122.0	122.6
原油輸入価格(ドル/バレル)	90.6	52.1	44.0

(備考)

1. 世界GDP(日本を除く)の実質成長率は、国際機関等の経済見通しを基に算出。
2. 円相場は、平成27年11月1日～11月30日の1か月間の平均値(122.6円/ドル)で同年12月以後一定と想定。
3. 原油輸入価格は、平成27年11月1日～11月30日の1か月間のスポット価格の平均値に運賃・保険料を付加した値(44.0ドル/バレル)で同年12月以後一定と想定。

※ 我が国経済は民間活動がその主体をなすものであること、また、特に国際環境の変化には見逃しがたい要素が多いこと鑑み、上記の諸数値はある程度幅を持って考えられるべきものである。

○ 海外主要国の経済成長率の見通し

○ IMFの世界経済見通し（平成28年10月4日発表）

	2016年予測	2017年予測
日本	0.5	0.6
米国	1.6	2.2
ユーロ圏	1.7	1.5
中国	6.6	6.2
世界計	3.1	3.4

注) 単位：％、実質GDP成長率の前年比。

○ OECDの世界経済見通し（平成28年9月21日発表）

	2015年予測	2016年予測	2017年予測
日本	0.5	0.6	0.7
アメリカ	2.6	1.4	2.1
ユーロ圏	1.9	1.5	1.4
世界計	3.1	2.9	3.2

注) 単位：％、実質GDP成長率の前年比

○ アジア開発銀行のアジア大洋州主要国・地域別の経済成長見通し
（平成28年9月27日発表）

	2016年予測	2017年予測
地域全体	5.7	5.7
中国	6.6	6.4
香港	1.5	2.0
韓国	2.6	2.8
台湾	0.9	1.5
インド	7.4	7.8
インドネシア	5.0	5.1
マレーシア	4.1	4.4
フィリピン	6.4	6.2
シンガポール	1.8	2.0
タイ	3.2	3.5
ベトナム	6.0	6.3

注) 単位：％、実質GDPの前年比伸び率

○ 日銀の経済見通し

（平成28年11月1日公表「経済・物価情勢の展望」）

—対前年度比、％。なお、<>内は政策委員見通しの中央値。

	2016年度		2017年度		2018年度	
	7月時点		7月時点		7月時点	
実質GDP 大勢見通し	+0.8~+1.0	+0.8~+1.0	+1.0~+1.5	+1.0~+1.5	+0.8~+1.0	+0.8~+1.0
	< +1.0 >	< +1.0 >	< +1.3 >	< +1.3 >	< +0.9 >	< +0.9 >

注1) 「大勢見通し」は、各政策委員が最も蓋然性の高いと考える見通しの数値について、最大値と最小値を1個ずつ除いて、幅で示したものであり、その幅は、予測誤差などを踏まえた見通しの上限・下限を意味しない。

2) 各政策委員は、既に決定した政策を前提として、また先行きの政策運営については市場の織り込みを参考にして、上記の見通しを作成している。具体的には、長短金利について、市場金利をもとにしつつ、展望レポートと市場参加者との物価見通しの違いを加味して、想定している。

3) 原油価格（ドバイ）については、1バレル50ドルを出発点に、見通し期間の終盤である2018年度にかけて、50ドル台後半に緩やかに上昇していくと想定している。その場合の消費者物価（除く生鮮食品）の前年比に対するエネルギー価格の寄与度は、2016年度で-0.6ポイント程度と試算される。また、寄与度は、2016年度下期にかけてマイナス幅を縮小し、2017年度初に概ねゼロになると試算される。

4) 各政策委員は、消費税率については、2019年10月に10%に引き上げられることを前提として、見通しを作成している。